

## 『つながり格差は学力格差』(志水宏吉・垂紀書房)を読む(その1)

毎年、「全国学力・学習状況調査」の結果が出ると、どの県が上位で、どの県が下位なのか、また、市町村単位では、どの学校が平均点が低いのか公表するべきだ・・・といった様々な声が聞こえてくる。なぜそれだけこの結果が取り沙汰されなければならないのかはわからないが、少なくとも二つの点は確認できる。一つはこの結果が「教育問題」として扱われているというよりも、明らかに「政治問題化」していること。もう一つは、点数の低いところ（県や学校）へのバッシングがセットになっていることである。こうした土俵の上では、この結果を正当な学力の論争に結びつけることは難しい。だから、この圧力を先取りするかのように、県や市によっては、学校に何%正答率を上げるかという数値目標を掲げさせて、あたかも教育問題として全面的に引き受けたように振る舞っているところもある。しかし、そもそもこの問題は、一つの学校がちょっと授業でがんばってみても、本質的な解決を生み出せるわけでもないし、よしんば成績が少し上がったとしても、そこに多くの意味を見いだせるかはむずかしい。もっと深いところに問題があることは、教育現場にいる者には想像がつく。

学力は地域や家庭の文化度や教育力、ひいては経済状況など、社会構造の問題が大きく関わっているからこそ、学校ごとや地域ごとの結果を公表してこなかった。端的に言えば、学力格差が、社会格差の指標ともなってしまうからだ。社会格差はそれこそ政治問題だ。われわれ教育の世界では、このことに気づくからこそ、こつこつと現場でその格差を埋めるべく努力してきた。しかし、そう簡単に埋まるものでもない。そうすると、学力調査結果を比べられると、一方では学校だけで片付く問題ではない・・・と思いつつも、結果に責任がないわけじゃなし、もう少し努力しなければいけないかな・・・などと思ってしまう。学校現場から「学力の格差は社会構造上のゆがみが原因だ！」と叫べば責任転嫁のようにも聞こえるし、黙ってしまえば自分たちだけの責任にされるし、なかなか議論をつくり出しづらいのがこの問題なのである。

しかし、本書では今までに語られなかった切り口で学力の格差の問題に迫っている。学力と階層の問題を追い続けてきている作者だからこそ提示できた視点である。つながり格差とは何か。また、それがなぜ学力格差と結びつくのか。次号で内容に触れて紹介したい。

※2月21日(土)、Ed.ベンチャー教育講演会の講師として、著者の志水宏吉氏が大和を訪れます。是非参加して、直接お話を聞いて下さい。詳細は次号でお知らせします！※

## 緊急報告！！東北支援 ライオン学校イベント開催

定期的な支援終了の日が徐々に迫る中、予てから子どもたちにリクエストされていた「ライオン学校のみんなでお出かけ」を実現するべく、11月はいつもの子どもたちと学生スタッフに加え、子どもたちの保護者やこれまで支援に関わったスタッフを交えた「お楽しみ会」を行いました。会の計画は子どもたちもスタッフと一緒に作り、近隣の公園でのバーベキューと石ノ森萬画館の見学をすることに決まりました。これまで上手く話し合いに参加できなかったある小学生の子はどんどん意見を出



してくれました。そして、その子が出してくれた意見の中でも適さないものは中学生が指摘して代替案を出すなどし、とても上手く話し合いを行うことができました。

そしていよいよお楽しみ会当日です。あいにくの雨にも関わらず、声をかけた子たちはほぼ全員が参加しました。火起こしや料理の下準備は班に分かれて行いました。最近の活動では、昼食の調理を子どもたちも一緒に行っていたので、その成果が発揮されたようでした。子どもたちは係の仕事に積極的に取り組み、順調に準備を進めることができました。久々に支援に参加したスタッフは、そのような子どもたちの働きぶりや話し方などから大きな成長を感じたようでした。一方で仕事を終えた子どもたちは、一人また一人と園内にある遊具ゾーンへと走っていき、雨でびしょり濡れながらも「最高に楽しい！」と言って遊んでいました。雨が降ろうが、お構いなしに外で元気に遊ぶ子どもたちのパワーは今でも健在です。

今回のお楽しみ会は学生スタッフだけで企画する初めてのイベントで、細かなところまで気の配られた企画とはなりません。その分、子どもたち自身のこれまでの成長や、ライオン学校の中で少しずつ積み上げてきた関係が試されたと思います。途中でトラブルもありましたが、無事に行程通り会を進められたことに、これまでの支援の成果を感じられました。



## 特別寄稿「私の思い…」シリーズ (VOL1)

### 育休に入って気づいたこと

下新原 なつみ

小学校の教員になって8年目に入り、子どもたちとの関わり方やクラス経営に自分なりの方法を見出し始めた頃、第一子を授かることとなりました。育休に入り、学校や教師を外側から改めて見たときにいくつかのことを感じました。

**1、子どもという存在** 教師の仕事に私なりの責任感を持っていたとっていました。しかし、命がけで産んだわが子を他人に預けるということを母親の立場から考えたとき、教師の責任は考えていた以上に重く、今までは、子どもを集団の中の一人と捉えがちになり、一人ひとりの存在の大切さを軽視しがちだったと気づかされました。

また、日々成長する我が子の姿を間近で見ること、学び成長していくということを根本から考えました。学ぶとは自身が興味をもち知ろうとすることから始まり、達成するために学習していくこと、成長とは少し難しいことに挑戦することで、次に進むことだと思います。私は教えることで、学習させているという自己満足に浸り、すぐ結果を求めていました。学び成長する機会を奪っていたのかもしれない。

**2、学校という場所** 時事問題、情報に触れる機会が増え、社会の動きと学校の関係について考えました。社会を構築していく上で、教育を社会の進む方向と合わせていくことは効果的な手段であると思います。しかし、教育の可能性は社会に順応することではなく、新たな社会を切り拓いていく力を養うことだと思います。ならば学校は、外に目を向けながら何を教えていくか見定める場所でないといけないと思います。少なくとも私は小さなスケールでしか物事を捉えていませんでした。教師には、客観視する力、外に目を向け変化を感じる力が必要です。そして、学校を社会の中でどのように位置付けていくのか考えることが大切だと思います。

育休に入り、教師の自分や学校を外側から見ることができたことは、私にとってとても重要な時間でした。

#### 【編集後記】理事のつぶやき一人のための集まりに人は集まらない・・・

先日、神戸で講演する機会を頂き、外国籍児童・生徒に対する支援活動の取り組みについてお話をしました。セミナー募集定員数の約半数の人が参加しましたが、その半数の人を集める為に主催者側は四苦八苦したようです。どうやら「人のための集まりに人は集まらなくなった」と主催者が言うように、人集めに古今東西で苦労しているようです。では、人はどこに集まっているのでしょうか。それは、自己啓発や自己利益となるセミナーには、高額の参加費を支払って参加しているとのこと。私たちはこの時代の中を生き抜いていかななくてはなりません。(S・C)